

皆さんの支援を力に

—— 第四五回岩手県学童保育指導員学校・
第三〇回合宿研修会を開催

宮井徳子

岩手県学童保育連絡協議会

二〇一七年八月三日付の地元紙に、大船渡市内の中学校の校庭にあった仮設住宅がすべて撤去され、市内すべての小・中学校で校庭が使えるようになるという記事が掲載されました。学童保育を支援してくれた、関西在住の知人にこの話をすると、「また、校庭に仮設住宅があったんですね……」とおどろかされていました。隣接する陸前高田市では、いまも一部の学校の校庭に仮設住宅があります。すべての学校に校庭に戻る日はまだ少し先とのこと。被災地はいまも復興の途上にあります。

八月二十六日、二十七日、岩手県学童保育連絡協議会（以下、岩手県学童保育連絡協議会）以下、岩手県学童保育指導員学校・第三〇回合宿研修会（以下、合宿研）を開催しました。

岩手県連協では全国の皆さんから

寄せられた募金を活用し、震災直後から被災地支援をつづけてきました。

最近では研修会への講師派遣、研修参加の際の移動支援などを行っています。気仙地区学童クラブ連絡協議会（以下、気仙連協。大船渡市と陸前高田市にある学童クラブで構成）ではこうした支援に後押しされ、指導員部会の活動が活発になり、「支援を受けるだけでなく自分たちでできることは積極的にやっつけていこう」という機運が醸成されてきたそうです。そのような背景もあり、二〇一七年の合宿研の開催地を募ったところ、「ぜひ、気仙で」と名乗りを上げてくれました。気仙地区での開催は東日本大震災後初、九年ぶりのことです。

合宿研一日目。会場の大船渡市三陸公民館では、「ようこそ、気仙へ！」の手づくり看板が参加者を迎えました。開会行事の冒頭、井上永治気仙協から一五七人が参加。全体の参加者数は二九二人で、東日本大震災以降、最多となりました。

東日本大震災から六年。再び気仙の地で合宿研を開催できたことは、岩手県の学童保育関係者にとって大きな喜びです。全国の皆さんのご支援があって、ここまで来ることができました。あらためてお礼を申し上げます。

被災地では、ハード面の整備は進みましたが、震災の影響による保育の困難さ、指導員不足、人口減による学校の統廃合など、さまざまな課題が横たわっています。そのなかにあっても、気仙の学童保育は連協内のつながりを深め、一步一步前に進んでいます。

全国の皆さんの応援が力になります。これからも被災地に心を寄せつづけていただければ幸いです。

連協会長は「震災を経験し、学童は子どもたちの安心、安全な居場所だということを感じた。この居場所を大切にしていこう」と決意を述べました。門田弘之岩手県連協事務局長は基調報告のなかで「被災地に心を寄せ、現状や声を風化させないよう、全国の仲間に向けていこう」と呼びかけました。つづいて七つのテーマで分科会を行いました。「学童保育の運営に関わって」の分科会では、保護者から「小学校の統合計画があり、学童の今後が不安。行政となんとか話しあっていきたい」との声が聞かれました。

分科会終了後は大船渡プラザホテルにて、夕食交流会を行い、各地域連協がこの日のために準備した余興を披露し、交流会を盛りあげました。余興の最後には地元・気仙連協が登場。楽しいダンスパフォーマンスに

は思わぬ飛び入り参加もあって、参加者は総立ちで声援をおくりました。気仙連協の皆さんの笑顔がとてもまぶしく、心にしみる交流会でした。

二日目の全体会はNPO法人福祉広場理事長・池添素さん、さいたま市学童保育連絡協議会事務局次長・加藤哲夫さんの講演が行われました。池添さんは自らの子育てにもふれながら、「子育ては子どもの夢をかなえる仕事」と語りました。加藤さんはさいたま市連協に所属する学童保育の法人化について解説し「まずは、困難を全体で支えあう。お互い助けあう関係、団結をつくっていく。その後に法人化がはかっているのではないかと投げかけました。岩手県内では学童保育の法人化について関心が高まっており、参加者は真剣な表情で聞き入りました。

今回の合宿研には、地元の気仙連